

## 本の紹介

谷口義明著「天文学者が解説する宮沢賢治『銀河鉄道の夜』と宇宙の旅」

光文社, 339p, 2020年7月30日発行

1,100円(税別), ISBN978-4-334-04483-1

それにしても、宮沢賢治全集はどうしてあれほど厚いのだろう。賢治は37歳で夭折したはずだ。それに、伝記を読む限りは、脇目を振らず創作していたわけではなく、そのときどき興味関心は移り変わり、執筆のみならず、活動は多岐にわたっていたように見える。そんななかでのあの膨大な作品数、本当にわけがわからない。

ご存じのように、賢治の地学的な素養は並外れている。子どもの頃からの石好きに加え、困窮している人たちの力になりたいという気持ちから農業を志し、盛岡高等農林学校(現岩手大学農学部)では、栽培実習だけでなく、地質学、鉱物学、土壌学など基礎となる科目を修めた。また、本格的な地質調査も行いルートマップ・地質図を作った経験がある。

その賢治、地質学のみならず、天文学にもうるさい。人生最後となる約10年、文学的な創作として心血を注ぎ、改訂を重ねた作品は『銀河鉄道の夜』である。

ここで紹介する「天文学者が解説する宮沢賢治『銀河鉄道の夜』と宇宙の旅」は、そのタイトルから明確なように、賢治の集大成ともいえる『銀河鉄道の夜』の謎解きに、天文学者が挑むという試みだ。

本書は大きく二部構成になっている。「第1章『銀河鉄道の夜』と賢治の時代」では、賢治の人となり、成長史、そして、賢治の時代の科学・天文学がコンパクトにまとめられている。ここで、賢治の生きた時代は、なかなかの激動期であることがわかる。少し挙げると、特殊相対性理論、一般相対性理論、太陽が銀河系の中心ではないこと、アンドロメダ星雲が銀河系とは別の銀河であること、宇宙が膨張していることなどが明らかになっている。時間、空間、質量、エネルギーの捉え方に革命的な変化が起こり、宇宙像の大変革を迫られた時代といえよう。「改革者」賢治にとっては、

腕のふるい所という時代かもしれない。

つづく「第2章『銀河鉄道の夜』を読む」が本書のメインパートだ。酸いも甘いも噛み分けた経験豊富な天文学者である谷口氏が『銀河鉄道の夜』を本気で読んでしまうとどうなるか、に対する結果が示されている。何十年と天文学の研究・教育の最前線で身体を張ってきたわけなので、常人が読むようにはすんなり読めない、ということはいくぶん理解できる。もう、こだわりの連続である。

これは私だけかもしれないが、天文学の入門書を購入したつもりが、読んでみると話の大半が素粒子についてだったり、時間や重力に思いのほか力点が置かれていたり、ということがよくある。それはそれで重要であることはわかるが、そういう話を読んでも、衝動的に外に出て夜空を見上げる、星座早見版・星座アプリを確認するという行動を誘発しない。

しかし、この谷口氏の本は違う。一貫して星空との繋がりが意識されている。賢治作品を読み返したくなる本であり、夜空を仰ぎ見たくなる本に仕上がっている。

考えてみると、賢治に劣らず著者の谷口氏も謎の多い人物である。愛媛大学奉職時は、愛媛大学宇宙進化研究センターの立ち上げに奔走、そして設立後はセンター長として激務をこなしつつも膨大な研究成果を挙げ、かつ一般向けの書籍も多数出版してきた。賢治の全集が厚いことと同様、谷口氏もいったいどのよう時間を捻り出しているのか、謎の人物なのである。

本書の「あとがき」ではこの謎の二人の交信について触れられている。

「私は賢治になれないが、賢治も私になれない。百年の時を経て、二人が電気を通して交錯した感じもする。有機交流電燈はまだ灯っているのだろうか。」

二人の交信の結果、どのようなことになってしまったのか、ぜひ本編でご確認頂きたい。

(茨城大学 伊藤 孝)

2025.1.10 受付

2025.1.21 学会ニュースレター公開

2025.1.20 学会ホームページ公開